

甲南 21 クリエイティブ・プラン中間報告

環境啓発活動による環境意識の向上と循環型コミュニティの創造

- ISO・環境ボランティア・環境創造・国際ネットワーク化を通じて -

2005 年 9 月 30 日 (中間報告)

甲南大学文学部人間科学科 谷口ゼミナール

(代表 谷本悠一郎)

甲南 21 クリエイティブ・プラン中間報告

環境啓発活動による環境意識の向上と循環型コミュニティの創造
- ISO・環境ボランティア・環境創造・国際ネットワーク化を通じて -

甲南大学文学部人間科学科 谷口ゼミナール

主旨・目的

今日、地球温暖化、酸性雨、農薬汚染、廃棄物処理などの環境問題が緊迫している。このまま環境問題を放置しておけば、すべての生命の存在を危うくする可能性があり、その解決に向けて環境意識を向上していく必要がある。そこで、私たち谷口ゼミは 2001 年度から「甲南大学における循環型コミュニティの創造」をテーマに、キャンパスにおいてはゴミの分別やリサイクルの活動を、甲南大学環境教育野外施設（広野）においては、自給自足生活の体験学習や米・野菜作りなどの活動を展開してきた。また、昨年度は、これまでの活動で得た情報をまとめたモデルプログラム・教材の作成を中心として、環境創造活動を行なった。

私たちは、昨年度のモデルプログラム・教材の作成を一つの区切りとし、今年度はこれまでの成果を積極的に学内外において活かす時期にきたと考えた。そこで、まず学内においては ISO14001（以下 ISO）というキーワードを新たに加えて活動を行なう。ISO は国際標準化機構が定める「環境マネジメントシステム規格」であり、第三者による客観的な認証制度である。学内において ISO を取得することは環境意識を向上し、循環型社会の実現を図る一つの手段となる。ISO 取得までの期間は少なくとも 2 年かかることをふまえ、今年度は、ISO を取得するための準備段階として学内の環境整備を行なう。次に学外においては、昨年度作成したモデルプログラム・教材を基盤とした環境ボランティア活動などを行なう。

したがって今年度は、「ISO 取得可能なキャンパスの創造 学内連携を通じて」、「環境ボランティア活動 甲南三法人・県立尼崎北高等学校との連携および『あいな里山村』再生ボランティア」、「環境創造活動の推進 2004 年度までの活動を継続・発展させて」、「国際ネットワーク化の推進 グローバルな視点からの環境意識の向上」という四つのプランを柱とし、活動していく。

プラン : 「ISO 取得可能なキャンパスの創造 学内連携を通じて」

1. 省エネルギー・省資源「実行委員会」への参加

省エネルギー・省資源「実行委員会」に参加する予定である。今まで環境問題に取り組んできた財務部管財課や甲南大学生生活協同組合など大学内の組織と学生のより大きなネットワークを作ることが出来ると考えている。この「実行委員会」に参加し、今後の甲南大学における取組みの方向性を話し合いたいと考えている。それに先立ち、環境マネジメントについて勉強会を行なっていく予定である。

2. 学内の環境に対する意識調査

7月27日(水)から29日(金)の3日間、文学部人間科学科専門科目「哲学思想基礎論」、「環境学基礎論」、広域副専攻科目「環境倫理学」の3科目、307名にアンケートを実施した。今回のアンケートは、甲南大学において日常的に行なわれている省エネ活動や、リサイクル活動などの認知度を調べるために行なった。このアンケートで認知度の低かったものを、今後の学内における環境啓発活動に活かしていこうと考えている。このアンケートの集計結果は、甲南大学生生活協同組合のホームページ上の「情報パック」および、学園祭における展示パネルに掲載予定である。

また、今後はより広範囲の学生に対してアンケートを行なう予定である。

甲南大学の環境活動に関するアンケート調査

この調査は、甲南大学内の環境活動に関する大学生の認識の現状を調べるためのものです。以下の質問は、学内における具体的な取り組みと、それに対する皆さんの行動に関するものです。本調査の結果は、今後の環境啓発活動に活用していきたいと考えています。なお、調査結果は学内HP上の「情報パック」10月号に掲載予定です。

1. 日常生活について

日常生活の中における何気ない行動が環境に影響します。そこで、皆さんの日常生活についてお聞きします。

1) 1) ゴミは分別して捨てる。
はい/いいえ

2) 2) タバコのポイ捨てが気になる。
はい/いいえ

3) 3) 電気やエアコンなどの節電を心がけている。
はい/いいえ

4) 4) 大学の環境関連の授業について受講している(した)。
はい/いいえ

5) 5) 環境問題に興味はない。
はい/いいえ

6) 6) ①地域の環境活動に参加したことがある。
はい/いいえ

②「はい」と答えた人にお聞きします。具体的に何をしましたか。
| |

アンケート(一部抜粋)

3. 学内における環境活動

昨年度に引き続き学内のゴミ分別、摂津祭(11月)におけるリサイクル活動の推進を行なう。ポスターなどを用いた呼びかけを中心に行なう。摂津祭の展示において、毎日リサイクル容器の回収率を示し呼びかけを行なう。

また、10月末および、11月初旬に「環境啓発シンポジウム」(第5回)が実施され、その支援を行なう。

4. 学外との交流における情報収集

ISO 認証を取得している神戸国際大学への訪問を予定している。実際に ISO 取得のために行なった活動(計画の立て方、学生・教職員に対する合意形成の方法など)環境に対する取組みを学びたいと考えている。ここで得た情報を甲南大学における環境啓発活動に活かしていく。

5 . ISO 委員会の発足準備

ISO の取得を最終目的とすることなく、今後の甲南大学における環境の取組みを継続・改善していくために、ISO 委員会を発足させる。この委員会に学生・教職員が携わることで、情報交換をより密にすることができると考えている。また、委員が ISO 取得など環境マネジメントについての知識を深めるための会議を行ない、シンポジウムの企画なども予定している。

プラン : 「環境ボランティア活動 甲南三法人・県立尼崎北高等学校との連携 および『あいな里山村』再生ボランティア 」

1 . 甲南小学校との環境教育キャンプ

6月18日(土) 自然における「原体験」を獲得することを目的とし、甲南小学校5年生の約60名に実践的な環境教育を指導した。具体的には、子どもたちに火起こしの実践や野菜の収穫を教え、現在の生活がどれだけ豊かであるかを知り、自然の恵みを感じるサポートをした。



火起こしの実践(6月18日)

2 . 県立尼崎北高等学校「環境類型」への援助

7月21日(木)から23日(土)の2泊3日の日程で兵庫県美方郡にある尼崎市立美方高原自然の家(とちのき村)において夏季学習合宿が行なわれた。

甲南大学谷口ゼミからは4人が参加した。高校生110名が3グループに分かれ、80分1コマずつ、環境に関する授業(自然の家周辺のオリエンテーリング)を行なった。自然の中を歩きながら、木の幹に聴診器を当て木が水を吸い上げる音を聞いたり、小さな滝のある池ではサンショウウオを観察した。生徒たちは普段、都会の中では出会えないものに触れ、興味津々な様子で授業に取り組んでいた。



植物の説明(7月22日)

3 . 「あいな里山公園」における環境教育活動の推進

6月19日(日) 「不耕起農業」による米作りを行なっている「あいな里山公園」での田植えに参加した。不耕起農業は、水田を耕さないまま農作物を栽培する農法である。苗の根が、耕していない固い土に根を張るため、稲が野生化し、冷害や風に強い太い根に変わる。それに加えて、不耕起農業は、労働時間の大幅な短縮と雑草の繁殖を抑えることなど、



田植え(6月19日)

様々な効果が期待されている。

通常の田植えと違い、田んぼの深さは一定ではなく、足元が不安定であった。土が固く、稲が浮き上がってくるので、稲を深くまで植える必要があった。また、希少種であるタコノアシなどの植物や、トンボやアブ、バッタなど様々な生物が生息していた。

プラン : 「環境創造活動の推進 - 2004 年度までの活動を継続・発展させて - 」

1 . 伝統的農法による米・野菜作り

無農薬による有機農法を実践することで、パーマカルチュア Permanent Agriculture の実現を目指す事を目的とする。

米作りは、田植えの準備として4月に田んぼをトラクターで耕し、5月に苗床作り、もみまき、田ごしらえをした。6月17日(金)~19日(日)、田植えを行なった。10月に稲刈り、脱穀を行ない12月に収穫したもち米を餅にし収穫祭を祝う予定である。

野菜作りとしては4月2日(土)、甲南大学環境教育野外施設の体験学習フィールドにおいて土作りを行なった。畑全体にトラクターをかけ、堆肥を撒き、畝立てをした。5月7日(土)に、夏野菜のナス、ピーマン、トマト、キュウリ、トウガラシ、サツマイモ、カボチャ、スイカ、トウモロコシを植えた。8月の「自給自足生活の体験学習」の際に、収穫した野菜をその場で調理して食料として使用した。収穫した野菜はいずれもみずみずしく非常においしくいただいた。今後は冬野菜の大根などを植える予定である。

農薬を使用せずに野菜を育てるには、非常に労力があることを実感した。例えば、除草剤を使わないため雑草が多く生えてきて、雑草抜きの作業がなかなか思うようにいかないこともあった。



夏野菜の収穫(7月9日)

2 . 自給自足の体験学習

昨年度に引き続き、8月8日(月)から12日(金)までの5日間、甲南大学環境教育野外施設において、自給自足の生活を行なった。参加者は延べ13名で、5日間通して体験学習をした学生は4名であった。

今年度は、現代の生活にどれだけの無駄が多いかを感じると同時に、日の出と日の入りといった自然のリズムを身に刻むことで現代のライフスタイルを見直すことを目的にした。具体的には雨水の有効利用、動植物の観察・調査をし、朝食時・昼食時・夕食時には今が何時ごろであるかの予想をして生活を行なった。

住居は昨年度と同じものを2棟作り、他に竹・藁を用いて竪穴式住居



竪穴式住居作り(8月9日)

を1棟作った。

飲料水は水道水を煮沸して用いた。生活用水・飲料水は使用することに記録をつけることで節水を心がけるようにした。日中はほぼ毎日35℃以上であったので、飲用する量は昨年度よりも多かった。しかし、生活用水の面では過した水で身体を拭くことや、竹で作成した食器は漬けおきして洗うなどした結果、昨年度よりも節水することができた。

食事は、甲南大学環境教育野外施設の田畑で収穫したものを用いた。あらかじめ収穫した野菜で作った保存食を持ち込むことや、野菜ともち米を一緒に炊き込むことで昨年よりも食事の種類が多くなった。

自給自足の開始直後は普段の生活リズムであったが、丸一日過ごす朝は日の出とともに起床し、夜は日の入りとともに睡眠する自然の生活リズムにかわった。参加者全員で話し合いをする機会もあり、環境問題を考えると同時に人間関係のあり方も考え直すことができた。



食事（8月10日）

3. ミミズコンポストの活用

今年度も昨年度に引き続き、生協・カフェパンセの協力のもと、9月12日（月）までに約260kgの生ゴミをミミズによって処理してきた。8月31日（水）に、ミミズを専門に研究している市成恵郎氏を招き、勉強会を開催した。ミミズの生態に関する基礎知識を改めて理解した上で、できた堆肥を最大限に有効活用するにはどのようにしていけばよいか等の研究を進めた。今後は、冬野菜を作る過程でミミズによってできた堆肥を活用する場合と活用しない場合にわけ、生長を比較していく。また、ミミズの生ゴミ処理過程を観察していく。



勉強会（8月31日）

プラン : 「国際ネットワーク化の推進

- グローバルな視点からの環境意識の向上 - 」

1. 学生テレビ会議の開催

7月27日（水）、甲南大学においてタイのプラナコーン＝ラジャバド王立大学と第2回国際テレビ会議を開催した。今回のテレビ会議では、「国際ネットワーク化の推進」というテーマのもと、日本からタイへの情報発信を行ない、今後の課題と展開について話し合いを行なうことができた。



テレビ会議（7月27日）

私たちは甲南大学環境教育野外施設における有機農業を通じた環境教育の実践、住吉川環境学習、カナダのフィールドワークの活動について発表を行なった。回線が混み合う時間帯だったためか、映像や音声途切れることもあったが、前回3月に行なった時よりもスムーズに進んだ。言葉の問題など課題は残ったが今後の進め方などの話し合いができ、貴重な情報交流の場となった。

2. 国外へのエコツアー

海外調査・研修の際、ネイチャートレイル、国営公園と国立環境教育機関の視察、先住民の伝統的な生活様式と文化に触れることなどを目的として、エコツアーを行なう。自然環境や環境問題に対する取組みを学び、国際的な視野を身につけることを目指している。

2006年3月には、マレーシアへのエコツアーを考えている。

3. 淡路島モンキーセンターにおける奇形ザル共同調査

7月30日(土)・31日(日)、Sara Turner(サラ・ターナー)氏(カルガリー大学大学院生)と淡路島モンキーセンターにおいて奇形ザルの共同調査を行なった。

30日は奇形ザルの観察と、ヤマモモの調査を行った。サルは、ヤマモモの実を好物としている。そのヤマモモの葉を調査することにより、新しい実がなる量を予測することができる。サルを生活環境を知ることができる。

31日は、サルの糞を回収した。サルと奇形ザルの糞を比較することにより、奇形ザルのストレスを知る事が出来る。回収した糞は、京都大学で詳しく分析される予定である。また、この日には、生後数時間の赤ん坊を見ることができた。残念なことに、赤ん坊は奇形ザルであった。両手の指が欠けており、両足の指は曲がったままであった。この奇形ザルを生んだ親ザルは、今まで奇形ザルを生んだことは無かったとのことであった。

今年で3年目になるが、11月には、甲南大学環境教育野外施設に

において無農薬で育てたサツマイモを寄贈し、再度奇形ザルの調査を行なう予定である。



ニホンザル(四肢奇形)



サラ・ターナー氏との共同調査(7月30日)